

テレビの吹き替え表現における男性文末形式の現実と虚構

下 條 正 純

要 旨

外国人による自然発話の日本語吹き替え文をテレビ番組から収集し、男性話者の文末形式を調査した。その結果、従来の男性文末形式の使用、不使用の程度には、番組による大きな隔たりが見られ、また使用の確認された男性文末形式は、「だ（＋付属語）」タイプの「だ」「だよ」「だね」「だろう」と終助詞単独タイプの「ぞ」「ぜ」「さ」に二分された。一方、各文末形式の使用量には偏りがあり、「だ」と「だよ」が多く、それらに比べて他の文末形式は極端に少なかった。また、高齢者の吹き替えには、「だ」「だよ」の代わりに「じゃ」「じゃよ」が〈老人〉を指示する「役割語」として使用される例があった。実際の日本語の発話行為から見ると、吹き替えの男性文末形式には、「ぞ」「ぜ」「さ」の使用が少ないという現実的な面と、「だ」「だよ」の多用及び「役割語」の使用という非現実的な面とが混在していることが分かった。

【キーワード】 吹き替え、文末形態、男性文末形式、ジェンダーマーカー、役割語

1. はじめに

テレビ番組における外国語話者の発話は、一般に何らかの方法で日本語に変換して提示されている。例えば、映像上の登場人物による“I wouldn’t go for coffee with you”という英語の発話に「あなたとコーヒーをつきあうつもりはないわ」という日本語字幕を付すなどである。しかし、ここで、もとの英語と変換後の日本語は自動的に一対一の関係を持つものではなく、後者は例えば「あなたとお茶したりしないわよ」とすることもできる。つまり、このような外国語から日本語への変換は表現上の創作行為であり、小稿で取り上げる吹き替えはその一つである。一方、話者が英語で直接発した上記の“I wouldn’t go for coffee with you”は、実はある映画の科白であって、これ自体も話者以外によって用意された「創作」である。これに対して、例えばニュース番組の街頭インタビューでマイクを向けられた人の回答は、当人の自然発話であり、いわば「現実」である。したがって、映画やドラマの吹き替えは「創作をもとにした創作」であり、そして

インタビューの回答など、準備された文のない自然発話の吹き替えは「現実をもとにした創作」である。小稿は、吹き替えという言語変換プロセスによって生み出された日本語のうち、後者すなわち「現実をもとにした創作」が、今日の実際の日本語に照らしていかなる様相を呈しているのか、特にその文末形式について論説するものである。

このテーマについて、筆者は下條（2007）で外国人女性による発話の吹き替えを調査して分析結果を論じた。今回はその第二段階として、外国人男性による発話の吹き替え文を対象として、どのような文末形態が使用されているのかを確認し、そのうち従来男性専用と言われてきた文末形式の使用状況について、その特徴を見出し、考察することを目的とする。また、日本語研究においていまだ論説の少ない「吹き替え」という題目を追及することが、多少なりとも当該分野に寄与することを期待する。

2. 先行研究

男性による実際の発話に見られる文末表現を記述した研究としては、代表的なものとして遠藤（2002）が挙げられる。そこでは、職場における男性の発話の傾向として、「従来女性専用と言われてきた語を使用する例がある」（p.45）こと、「従来男性専用と言われた語句の使用が減ってきている」（同）こと、及び女性による男性語使用を挙げて、文末形式における男女の性差が希薄化していると指摘している。

このような実際の発話行為の様相に対して、吹き替えの日本語に見られる文末形式はどうであろうか。筆者は、下條（2007）でその調査結果から、外国人女性話者の吹き替え文では、全体的に文末には敬体の使用が多いものの、私的な立場からの発言や主観的な内容の発話では、職業的立場からの発言や客観的な内容の発話の場合よりも女性文末形式の使用が多いという分析結果を示した。一方、実際の女性の発話行為はというと、小林（1993）、高崎（1996）、尾崎（1999）、水本（2006）などで報告されているように、従来の女性専用形式の使用が減ってきている、あるいはほとんど使われなくなっているというのが現状である。つまり、このような今日の言語状況から乖離するかのよう、吹き替えでは従来の女性専用形式が使用されているのである。こうした吹き替えに見られる文末表現は、男性の場合どのような様相を呈しているのだろうか。以下に、テレビ番組の調査結果とそれに基づいた考察を記述する。

3. 調査

本章では、録画したテレビ番組から、外国人男性による自然発話の日本語吹き替え文を書き起こし、文末形態ごとに分類、集計したデータと結果について記述する。初めに3.1 で調査に用いたテレビ番組のデータについて記す。そして、3.2 で調査結果について、まず外国人男性話者の吹き替え文の文末形態として、どのような言葉が使用されているのかを概観し、次いでその中の男性文末形式⁽¹⁾について用例を挙げて詳しく述べる。

3.1 調査データ

小稿の分析に用いた調査データは表1のとおりである。話者が男性の場合と女性の場合とを比較するために、外国人女性の吹き替えを分析した下條（2007）と同一のテレビ番組をデータソース（稿末「資料」に詳細）として使用した。データソースには外国人話者の自然発話の吹き替えが多いテレビ番組が選ばれている。

表1 調査データ

番組名	外国人男性話者数	文末データ数 ⁽²⁾
世界ふしぎ発見	38	178
まさかのミステリー	38	75
世界まる見え！ テレビ特捜部	61	166
美の巨人たち	11	85
計	148	504

3.2 調査結果

3.2.1 文末形態の内訳

四つの番組で確認された外国人男性の吹き替え文の文末形態は表2のとおりである。男性による発話の吹き替えには敬体が他の文末形態より相対的に多用されているケースの多いことが分かる。表2の数値を見るかぎり、ほとんどの文末に敬体を使用する番組（『世界まる見え！』、『美の巨人たち』）とそうではない番組（『世界ふしぎ発見』、『まさかのミステリー』）とに大きく二つのタイプに分かれており、後者の場合は敬体の使用程度は番組によって更に異なっている。

表 2 番組別文末形態データ数内訳

番組 文末形態	世界 ふしぎ発見	まさかの ミステリー	世界まる 見え！	美の巨人たち
男性文末形式	37 (20.8%)	25 (33.3%)	5 (3.0%)	2 (2.4%)
敬体（＋付属語）	112 (62.9%)	21 (28.0%)	158 (95.2%)	78 (91.8%)
その他 ⁽³⁾	29 (16.3%)	29 (38.7%)	3 (1.8%)	5 (5.9%)
計	178 (100%)	75 (100%)	166 (100%)	85 (100%)

一方、各番組において男性文末形式が占める割合は、2.4%から 33.3%まで大きな隔たりを見せている。吹き替え文における男性文末形式の使用、不使用が番組によって明確に分かれていることを示す結果である。これら四番組の中で、『美の巨人たち』は吹き替えられている発話に学術的あるいは専門的な内容のものが特に多く、このことが男性文末形式を含むタイプの文体の不使用に関係している可能性が推察される。しかし、他の三番組にはこの点で大きな違いは認められず、『世界まる見え！』における男性文末形式の使用度が低い理由を『美の巨人たち』と同様に発話内容で説明することは困難である。

3.2.2 男性文末形式の内訳

各番組において使用された男性文末形式の内訳は表 3 のとおりであった。また、それらの男性文末形式が含まれた吹き替えのデータ文を下の(1)～(13)に挙げ、それぞれの話者の属性を括弧に示す。なお、文末形式として「だ」「だよ」のヴァリエーションである「じゃ」「じゃよ」の使用があるが、「だ」「だよ」とは異質の議論が必要であると考えるので、表 3 の「だ」「だよ」のデータ数には加算せず、括弧に別記している。「じゃ」「じゃよ」については、4.2 で論及する。

表 3 男性文末形式データ数

男性文末形式	データ数	番組別データ数内訳			
		世界ふし ぎ発見	まさかの ミステリ	世界まる 見え！	美の巨人 たち
だ（じゃ）	28（4）	11(4)	12	4	1
だよ（じゃよ）	24（4）	12(4)	11	1	0
だね	1	1	0	0	0
だろう	4	3	0	0	1
ぞ	1	1	0	0	0
ぜ	1	0	1	0	0
さ	2	1	1	0	0
計	61（8）	29(8)	25	5	2

男性文末形式を含む吹き替えデータ文例

- (1) これは僕に届いた感謝の手紙なんだ。 （ラグビー審判員、オーストラリア）
- (2) ほら、ここから始まっているんだ。 （マルタ先史学会会長、マルタ）
- (3) 今の状態ではとても危険だ。 （観光ボートの船長、クロアチア）
- (4) こっちは大マジだ。 （地方都市の老人、イギリス）
- (5) 実はこれはパイロンなんだよ。 （航空ショーの観客、オーストリア）
- (6) 被害が激減したんだよ。 （警察犬教官、南アフリカ）
- (7) これがキングロックだよ。 （ガイド、オーストラリア）
- (8) このムロボが一番いい声だよ。 （鳥の鳴き声審査員、マレーシア）
- (9) これは海底に普通はない人工物だね。 （水中カメラマン、マルタ）
- (10) スペインの方が良く見えたんだろう。 （少数民族の長老、エクアドル）
- (11) ひとつ、食べてみなさい。おいしいぞ。 （漁師、ペルー）
- (12) テレビや新聞で美人だらけの村って言ってたぜ。 （通行人、中国）
- (13) 食後のデザートには最高さ。 （砂漠の町の住民、ヨルダン）

ここでは、男性文末形式を積極的に使用している『世界ふしぎ発見』（以下『世界』と記す）と『まさかのミステリー』（以下『まさか』と記す）の調査結果に注目することにする。まず、両番組で使用の確認された男性文末形式は、「だ」「だよ」「だね」「だろう」という「だ（＋付属語）」タイプ（データ文(1)～(10)参照）と、「ぞ」「ぜ」「さ」の終助詞単独タイプ（データ文(11)～(13)参照）に分類される。前者は、断定の助動詞「だ」の使用が従来の日本語では男性表現であると言われてきたものにあたるため、小稿でも男性文末形式とみなしている。ただし、尾崎（1999）に指摘のあるように、今日の実際の発話では特に若い世代で女性にも「だ」の使用が広がっており、かつてに比べると中性的な表現となっているのが現状のようである。これに対して、後者の「ぞ」「ぜ」「さ」という終助詞は、今日でも一般に男性専用形式とされているが、遠藤（2002）によると、男性の実際の発話で用いられることは少ないとされている。この点については、表3においても「ぞ」「ぜ」「さ」を使ったデータはわずかであり、吹き替えの文末が実際の日本人男性の発話に似た現実的な様相を呈している。

表4 「だ」の使用形態別データ数

使用形態	データ数	番組別データ数内訳	
		世界	まさか
～んだ	19	8	11
名詞＋だ	4	3	1
計	23	11	12

表5 「だよ」の使用形態別データ数

使用形態	データ数	番組別データ数内訳	
		世界	まさか
～んだ	19	11	8
名詞＋だ	4	1	3
計	23	12	11

次に、表3に挙げられている文末形式の中で特に使用の多い「だ」と「だよ」について詳しく見る。「だ」は、表4に示すとおり、23例中19例が文(1)(2)のように「～んだ」の形式で用いられており、全てが説明文であった。これについては、調査対象の外国人男性の発話のほとんどが問い掛けやインタビューに対する回答であることを反映していると考えてよいだろう。また、残り4例は文(3)(4)のように「名詞＋だ」の形式であり、これらも一様に説明文であった。一方、「だよ」については、表5に示すとおり、23例中19例が文(5)(6)のように、「だ」の場合と同様、「ん」に後接した「～んだよ」

の形式をとり、このうち 18 例（『世界』11、『まさか』7）が説明文、1 例（『まさか』）が疑問文である。そして、残りの 4 例は文(7)(8)のように「名詞+だよ」の形で使われており、文脈から判断していずれも説明文である。このように『世界』と『まさか』では外国人男性による発話の吹き替え文の文末形式として「だ」と「だよ」が相対的に多く使用され、その多くが「ん」に後接した「～んだ」「～んだよ」の形式をとり、また、「だ」「だよ」を使ったほとんどが説明文であった。

4. 分析と考察

ここでは、3.2 で記述した調査結果をもとにして、次の三点について論究する。初めに、吹き替え文の文末に多く確認された「だ」「だよ」の使用について、外国人男性の吹き替え文を、日本人男性による実際の発話と比較し、吹き替えと現実との異同について記す。次に、文末形式「だ」「だよ」のヴァリエーションである「じゃ」「じゃよ」について、映像上における話者の属性あるいは役割という観点から、その用いられ様を論じる。そして最後に、「だよ」が吹き替えの文末形式として男性話者にも女性話者にも使用されていることを取り上げ、それぞれどのような言語事情を反映しているのかについて一解釈を提示する。

4.1 日本人男性の場合との比較

3.2 で取り上げた『世界』と『まさか』には、外国人と同じように問い掛けやインタビューに答える日本人も登場している。そこで、上述のように外国人男性の吹き替え文に用例の多い「だ」と「だよ」について、同じ番組に出た日本人男性の発話文の文末を調べ、外国人の吹き替え文の場合との比較を行った。

小稿で使用したデータソースでは、問い掛けやインタビューに答える形式で登場した日本人は、両番組を合わせて 11 名（『世界』3、『まさか』8）おり、データ文は 19 例あった。しかしながら、これらにおいてはほとんどの文末が敬体を使用しており、「だ」「だよ」を使用した例はなかった。また、『世界』では、これらとは別に番組のレポーターが同行取材するかたちで、ある回のほぼ全編にわたって登場してさまざまな話をする日本人考古学者が一名いるが、その発話文の中に 1 例（文(14)）のみ「だよ」の使用が認められたにすぎない。

(14) 貧弱な入り口だけど、中は立派だよ、結構。

(考古学者、日本)

このように、文末形式「だ」「だよ」は、外国人男性の発話の吹き替え文では比較的多用されているものの、同様に問い掛けやインタビューに答えるという状況で発話された日本人男性の文末には多用される様相はまったく認められない。つまり、外国人男性の吹き替え文に見られる「だ」「だよ」の使用は、日本人男性による実際の発話とは大きく異なった、吹き替え世界の虚構であると言える。一方で、3.2.2 で述べたように、男性専用形式の「ぞ」「ぜ」もしくは「さ」を用いた終助詞単独タイプの吹き替え文については、日本人男性による実際の発話と同様に用例が少ないという現実的な側面が見られた。これらを考え合わせると、外国人男性の吹き替え文の男性文末形式は、文末形態によって虚実が混在した様相を呈していると言えるだろう。

4.2 「じゃ」「じゃよ」の役割

次に、外国人男性の発話の吹き替え文末に見られる「じゃ」「じゃよ」について取り上げる。小稿の調査では、『世界』でのみ「じゃ」「じゃよ」が使用されており、発話者は4名であった。データ文(15)～(18)は、これら4名の吹き替え文の例である。

(15) そうじゃ、そうじゃ、おう、そうじゃ。(砂漠の民、アラブ人、ヨルダン)

(16) ここはナバティアの王の風呂なんじゃよ。(遺跡管理人、アラブ人、ヨルダン)

(17) これじゃよ。(馬引き、ラテン系、南米)

(18) あれは40年前のことじゃった。山の麓に鱒釣りに行ったときのことじゃ。急に地震が起きて、川の水が熱湯に変わったんじゃ。

(公園の老人、白人、エクアドル)

「じゃ」は「だ」のヴァリエーションであって、文(15)～(18)でも「じゃ」を「だ」に、「じゃよ」を「だよ」に置き換えることができる。「だ」「だよ」は、例文(1)～(8)の話者を見てもそうだが、小稿の調査で「だ」「だよ」が吹き替えに使用されていたすべての発話者を比較しても、特定の属性を持った話者に使用されている傾向は見出せない。これに対して、「じゃ」「じゃよ」の話者についてその属性を見てみるとどうであろうか。まず、年齢については、四名とも明らかに60代以上の高齢者であると推察され

る。一方、人種、肌の色、国籍、及び映像の中で何をしている人物であるか（職業など）については、共通点が見当たらない。このことから、『世界』では、「じゃ」「じゃよ」を高齢者の言語描写に使用していると考えることが順当である。つまり、ここで「じゃ」「じゃよ」は、「だ」「だよ」の持つ男性ジェンダーマーカ―の機能に加えて、年齢マーカ―の働きをする文末形式として使用されているのである。

金水（2003）は、「じゃ」を「役割語⁽⁴⁾」の〈博士語〉として挙げ、〈博士語〉は〈老人語〉の一種であると述べている。小稿の「じゃ」「じゃよ」に関する上の記述は、「じゃ」が「役割語」としての〈老人語〉であることに合致するものである。ただし、〈博士語〉でもあるかと言えば、『世界』ではそのようには使われていない。同番組でも〈博士〉に類する外国人男性として、「考古学者」、「歴史学者」、「大学教授」等の肩書きで7名が登場しているものの、そのいずれの吹き替えにも「じゃ」「じゃよ」は使用されていない。さらに言えば、この7名の〈博士〉のうち5名は〈老人〉でもある。金水（2003）の記述では、〈老人〉〈博士〉の二つの属性を満たすキャラクターに「じゃ」が使用されているが、『世界』では「じゃ」の使用対象に〈老人〉という属性を要求してはいるが〈博士〉は排除されているのである。小稿の調査では用例が少ないため、〈老人〉以外に要求されている属性が何であるかは特定できないが、〈老人〉に属する〈博士〉たちを使用対象から明らかに外していることから、ほかに何らかの属性が「じゃ」使用の条件となっているものと推測される。

吹き替えの言語描写においては、実際の言語表現を反映するジェンダーマーカ―にせよ、共時的な現実から切り離された「役割語」にせよ、それを使用するか否か、そして使用する場合も話者のどのような属性と結びつけて使用するかは、テレビ番組個々の制作姿勢に左右されるはずである。特に漫画、アニメ、小説など創造世界の言語である「役割語」は、それを実際の発話の吹き替えに使用することによって、その現実性を薄めたり形を変えたりするといった影響を及ぼすものと考えられる。小稿で扱った四番組中、男性文末形式を積極的に使用したのが二番組であり、さらに「役割語」を使用しているのがそのうちの一番組のみであるという事実は、吹き替えによる影響や効果への配慮を反映しているのだろう。吹き替えは決して表現手段がある言語から他の言語に置換するというだけの無色透明なフィルターではないのである。

4.3 男性の「だよ」と女性の「だよ」

小稿では、マグロイン（1993）や益岡・田窪（1994）でも言われている女性は断定の助動詞「だ」の使用を避けるという従来の傾向から、「だよ」を男性文末形式として扱っている。実際、外国人女性の吹き替えについて論じた下條（2007）の調査でも、ごく一部の例外を除いて「だよ」の使用は確認されなかった。実際には今日では若い世代の女性を中心に「だよ」の使用が広がっているが、吹き替えの世界では「だよ」など「だ」の使用は男性の表現なのである。そのような中で、女性話者の吹き替えに使用された例外的な「だよ」が、66歳の英国人女性の吹き替え文(19)と、84歳の中国人女性の吹き替え文(20)の2例である。

(19) 「かっこ悪い」と思って、もうやらなくなると思ったんだよ。

(20) 村の子たちはみんなきれいだよ。

下條（2007）では、これらの「だよ」を「役割語」ではないものの〈老人〉を示唆するものと位置付けた。ここでこれを仮に女性の〈老人語〉と呼ぶことにしよう。そうすると、「だよ」は男性用のジェンダーマーカーであり、女性用の〈老人語〉である。そして、女性には別に「だよ」に相当するものとして「よ」が、男性には別に「じゃよ」という〈老人語〉が用意されているという構造が見える。男性の〈老人語〉「じゃよ」が実際の発話では通常使用されることのない虚構の言語であるのに対し、女性の「だよ」は吹き替えで〈老人語〉として機能するとともに、実際の発話でも「よ」に代わるものとしてその使用が広がっている。中村（2007）は、日本語の標準語は男ことばであり、女ことばは非標準であると述べている。ところが、「だよ」の使用にもみられるように、女性による従来の男ことばの使用（男ことばの中性化）が進み、今日の女性の発話行為は変化と広がりを見せている。これに対して、従来標準であった男性の発話行為が非標準の方向へ広がる、つまり男性による女ことばの使用が進むということは、女性の場合と同じように起こっているとは言い難い⁽⁵⁾。このように閉塞した男性の発話行為は、あえてそれを広げるならば「役割語」のような虚構の言語表現に頼らざるをえないことになる。吹き替えの男性文末形式は、このような現実の言語事情としての閉塞感を反映しているようにも考えられるのである。

5. まとめ

小稿では、問い掛けやインタビューに答える外国人男性の登場するテレビ番組をデータソースとして、彼らの発話の日本語吹き替え文について、文末表現の使用状況を調査し、その結果から主に次の 1)、2) の特徴的な傾向を見出した。そして、それらの調査結果から発展して、更に 3)、4)、5)の考察を示した。

- 1) 使用が確認された男性文末形式は、大別して「だ（＋付属語）」タイプと終助詞単独タイプとがある。
- 2) 男性文末形式の使用頻度には偏りがあり、「だ」「だよ」以外の使用は非常に少ない。
- 3) 外国人男性の発話の吹き替えに見られる「だ」「だよ」の多用は、日本人男性の自然発話とは大きく異なった、吹き替えにおける虚構と言える。
- 4) 「だ」「だよ」に代わる文末形式として、「じゃ」「じゃよ」が高齢者の吹き替え文に「役割語」として使用されている。
- 5) 男性の実際の発話行為の閉塞性が、吹き替えにおいて非現実の表現である「役割語」の使用につながっていると考えられることができる。

男性の吹き替え文末に多く使用されている「だ」「だよ」は、同じ番組に登場する日本人男性の発話ではわずかに 1 例見られたにすぎず、現実の発話から乖離した様相を示している。その一方で、吹き替えにおいて使用がごく少数しか確認されなかった終助詞単独の男性文末形式「ぞ」「ぜ」「き」については、今日それらの使用が少なくなっている実際の発話にむしろ近い傾向が見られた。しかしまた、「じゃ」「じゃよ」という普通は使われることのない「役割語」の使用は、「だ」「だよ」と同様に、現実の発話行為と様相を異にするものである。男性の吹き替え文の文末には、このように発話行為の現実と虚構とが混在しているのである。

附記

小稿は、下條（2008）「吹き替えに見られる男性文末形式の様相」『佐賀大学留学生センター紀要』7 を再考し、修正したものである。

註

- (1) 小稿では、従来の日本語において男性専用形式、男ことば、男性的表現などとみなされてきた文末形態を指し、今日の男性による発話行為の実状と必ずしも一致するものではない。
- (2) 文末データ数は文の数にほぼ相当するが、発話データであるため体言止など不完全な文も含む。小稿では、発話が終わるか、あるいは次に新しい文が始まる部分を文の区切りとみなして文末データ数を累計している。
- (3) 男性文末形式以外の「常体＋（付属語）」や、不完全な文（体言止）などの文末形態が該当する。
- (4) 金水（2003）では次のように「役割語」を定義している。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞く
と特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思
い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、そ
の人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、
その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（p.205）

- (5) 2の先行研究で記したように、遠藤（2002）では従来女性専用とされていた語が男性にも使用される例が紹介されている。しかし、そこで示されているデータ数を見るかぎり、男性の発話行為全体の中ではごく一部であって、女性による従来の男性語使用の広がりと同様にその反対方向の動きとみなすことには躊躇する。むしろ、女性の言語行為の中性化の進行にともなって、従来の女性専用形式自体が中性化もしくは標準化し、それを男性が使用し始めたと考えることが適当ではないかと思われる。

参考文献

- (1) 遠藤織枝（2002）「男性のことばの文末」、現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房、33-45
- (2) 尾崎喜光（1999）「女性専用の文末形式のいま」、現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房、33-58
- (3) 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- (4) 小林美恵子（1993）「世代と女性語―若い世代のことばの『中性化』について―」『日

本語学』12(6)、181-192

- (5) 下條正純 (2007) 「吹き替えで表される外国人女性の発話—文末形式からみた現実と虚構—」『佐賀大学留学生センター紀要』6、17-28
- (6) 高崎みどり (1996) 「テレビと女性語」『日本語学』15(10)、46-56
- (7) 鳥飼玖美子 (2004) 「吹き替え反対論」『論座』106、134-135
- (8) 中島悦子 (1999) 「疑問表現の様相」、現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房、59-82
- (9) 中村桃子 (2007) 『〈性〉と日本語 ことばがつくる女と男』日本放送出版協会
- (10) マグロイン花岡直美 (1993) 「終助詞」『日本語学』12(6)、120-124
- (11) 益岡隆志・田窪行則 (1994) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- (12) 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター—文末詞(終助詞)使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』5 (<http://www.soc.nii.ac.jp/gender/index.html>)
- (13) ——— (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルター」、日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』ひつじ書房、73-94
- (14) 村松泰子 (1998) 「マスメディアで語っているのはだれか」、村松泰子・H. ゴスマン編『メディアがつくるジェンダー 日独の男女・家族像を読みとく』新曜社、9-40
- (15) 谷部弘子 (1997) 「新聞報道の外国人談話に見る男女差—文体と終助詞使用の関係を中心に—」『ことば』17、58-72
- (16) ——— (2001) 「オリンピック報道に描かれる女性たち」、遠藤織枝編『女とことば』明石書店、171-179

資料

小稿で使用したデータソースは下記のとおりである。

- (1) 『世界ふしぎ発見』(東京放送)、2004年5月8日、2004年5月29日、2004年6月5日、2004年6月12日、2004年6月26日、2004年7月3日、2004年7月10日、2004年7月17日、2004年7月24日、2004年7月31日、2005年8月27日放送
- (2) 『まさかのミステリー』(日本テレビ)、2005年8月26日、2005年9月1日、2005

年9月16日、2005年10月14日、2005年10月21日、2005年11月4日放送

- (3) 『世界まる見え！ テレビ特捜部』（日本テレビ）、2004年5月10日、2004年5月17日、2004年5月24日、2004年5月31日、2004年6月7日、2004年6月14日放送
- (4) 『美の巨人たち』（テレビ東京）、2004年5月15日、2004年5月29日、2004年6月5日、2004年6月12日、2004年6月19日、2004年6月26日、2004年7月3日、2004年7月24日、2005年9月24日、2005年10月1日放送

（佐賀大学留学生センター准教授）